



「蒙古襲来像」を書き換える

歴史情報研究部門  
比較社会文化研究院 服部英雄

蒙古襲来は日本が経験した数少ない国内での外国戦争である。戦前には神風が吹いた、日本は神の国であると宣伝されていた。戦後にもそうしたイメージがあまり変わらなかった。台風によって日本が救われた、蒙古軍は長崎県鷹島にて全滅したという結論が変わらなかったからだ。しかし調べてみるとこのストーリーはどうにもおかしい。図示したものは竹崎季長の『蒙古襲来絵詞』の1シーンであるが、台風が通過した4日後、弘安4年閏7月5日に生の松原を出発し、酉の時(夕方6時)の合戦を目指したと明記されている。これまでの研究は、蒙古軍がすべて鷹島にいるとしてきたから、行く先は鷹島であった。しかし陸路では90キロである(下山門駅と鷹島口駅の距離)。海路であれば糸島半島、呼子半島を迂回していくから120キロ近くはなるだろう。画かれているような櫓押しの船は時速4キロほどである。寝ずに漕いでも30時間近く、2日以上はかかった。人はそんなにも漕ぎ続けることはできない。酉の時までに漕ぎ着く。ならば目的地は鷹島ではない。博多湾・志

賀島である。調べてみるとこの季節の旧暦5日つまり月齢4日の博多湾は、ちょうど夕方6時(酉の刻)に干潮になる。つまり満潮時に漕ぎだして、引潮に乗って、志賀島沖に停泊する蒙古船を襲撃した。

敵が目の前にいたからこそ、生の松原に布陣していた。蒙古の攻撃目標は大宰府なのだから、至近の攻撃基地である志賀島を台風後にも占領し続けた。すなわち東路軍(高麗主体軍)は博多湾、志賀島・能古島にいて、江南軍(旧南宋軍)は鷹島に停泊して、博多湾を目指していた。

逆に高麗と対馬の距離はわずか50キロで、通信使の記録を見ても必ず一日で渡海している。対馬沿岸に碇を下ろさないと、潮に流されて漂流だった。これまでの研究は蒙古軍到着地「日本世界村」を対馬だとして、対馬に渡るまでに20日も要したとしていた。不自然にすぎる。むしろ世界siga村は志賀島が正しい。研究史をすべて書き換えるべく、鋭意作業中。



5	木	●大	09:30	21:54	03:09	15:42
6	金	大	10:05	22:22	03:41	16:11
7	土	中	10:41	22:51	04:13	16:40
8	日	中	11:17	23:21	04:47	17:10
9	月	中	11:56	23:54	05:24	17:41

9月9日(月齢4)が弘安4年閏7月5日(太陰太陽暦)の潮に相当する。9月5日が新月(月齢0、朔日)。左からそれぞれ満潮、満潮、干潮、干潮の時刻を示す。

竹崎季長『蒙古襲来絵詞』より。  
生の松原を出発して酉の時に到着。向かった先はどこか。



今山系石斧の地球科学的精密分析で見えてきた新事実

精密分析部門  
アジア埋蔵文化財研究センター 足立 達朗

今山系石斧は、福岡市西区横浜に位置する今山遺跡で製作された弥生時代の石斧です。この石斧は、九州の広域で発見されており、その分布範囲は福岡をはじめ、東は大分、西は佐賀、南は熊本県・宇土半島にまで広がるとされています。特に福岡や佐賀では、今山系石斧の割合が、出土する石斧全体の7割を超えるとされ、弥生時代の一大ブランド石斧であったと考えられています。これまで今山系石斧の研究は、大量の石斧生産を可能にする専業工人集団・集落の出現や、製品を各地へ供給するための広域流通網の整備とその後の交易の活発化などを明らかにしており、弥生社会のモデルを構築するための重要な役割を果たしてきました。

このように考古学的に重要な意味を持つ今山系石斧ですが、これまでは主に石材表面の肉眼観察に基づいて同定され

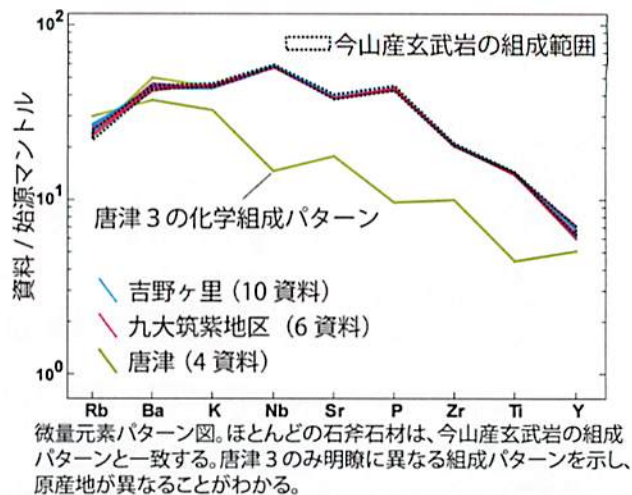
ており、プレパラートを用いた顕微鏡観察や鉱物化学組成、全岩化学組成などで表現される石材の材質的特徴に基づいた厳密な同定はほとんどなされてきませんでした。そこで、アジア埋蔵文化財研究センターでは、今山系石斧とされてきた資料と今山に産出する石材を対象として地球科学的高精度分析を実施し、材質的特徴に基づく比較を行いました。

まず顕微鏡観察や鉱物化学組成分析を行った結果、今山に産出する岩石は単斜輝石カンラン石玄武岩という岩石であることがわかりました。また全岩化学組成分析からは、アルカリ玄武岩に分類されることがわかり、なおかつその化学組成は今山全体において非常に均質であることが判明しました。これは、石斧石材の全岩化学組成が今山産石材のもの一致すれば、高い可能性で今山産であると示せることを意味します。

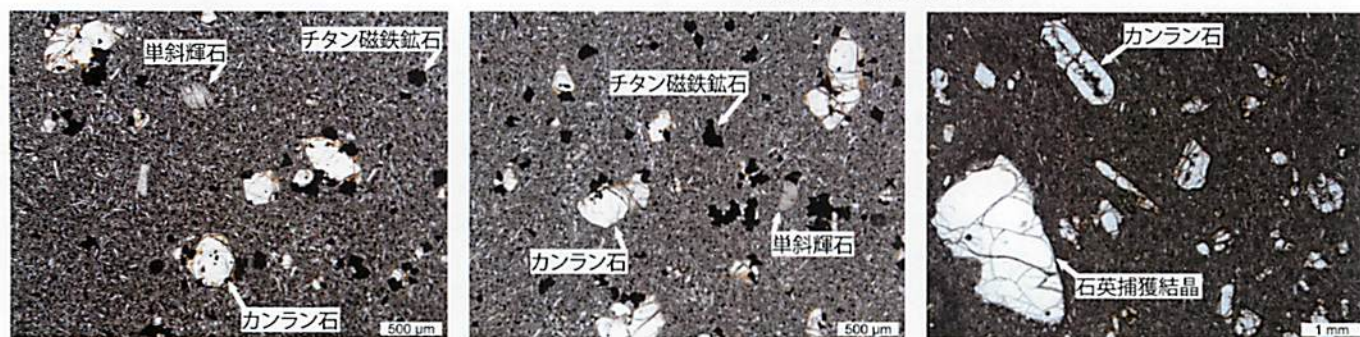
(次ページへ続く)

この結果を踏まえ、いわゆる今山系石斧とされてきた、九州大学筑紫地区遺跡群の6資料、吉野ヶ里遺跡の10資料、唐津周辺の遺跡の4資料について、同様の分析を行いました。すると、ほとんどの資料は、構成鉱物、鉱物化学組成、全岩化学組成が、今山のアルカリ玄武岩とびたりと一致し、今山産石材であることが実証されました。

しかし、唐津・堂の前遺跡から出土した石斧資料1点(資料番号:唐津3)は、石英の捕獲結晶を含むカンラン石玄武岩であり、全岩化学組成はアルカリ玄武岩の特徴を示さないなど、明瞭に異なる岩石であることが明らかになりました。この結果を踏まえ、現在アジア埋蔵文化財研究センターでは、この石材の産出地を特定する地質調査を実施しています。今後の研究の進展をご期待ください。



微量元素パターン図。ほとんどの石斧石材は、今山産玄武岩の組成パターンと一致する。唐津3のみ明瞭に異なる組成パターンを示し、原産地が異なることがわかる。



分析を実施した石材の顕微鏡写真。左:今山産の単斜輝石カンラン石玄武岩。中:吉野ヶ里遺跡出土の石斧石材。これも単斜輝石カンラン石玄武岩である。右:唐津・堂の前遺跡出土の石斧石材(唐津3)。石英の捕獲結晶を含むカンラン石玄武岩であり、今山には産出しない岩石である。

## 古墳時代の地域社会と古代国家形成過程 —北部九州・遠賀川中流域をフィールドとして—

文化財調査法開発部門  
人文科学研究院 辻田 淳一郎

現在、筆者を含めた共同研究グループでは、日本学術振興会・基盤研究(B)「雄略朝」期前後における地域社会と人制の考古学的研究:北部九州を中心に(平成23~26年度、研究代表者:辻田淳一郎)により、古墳とその出土資料の調査・研究を通じた古墳時代の地域間関係および地域社会の研究を進めています。日本列島の古代国家形成史上の画期として考えられてきた、5世紀後葉の「雄略朝」の時期を中心として、地域社会から列島の国家形成過程を考えることを目的とした研究です。具体的な調査・研究の柱は次の2つです:①福岡県飯塚市に所在する山の神古墳出土遺物(考古学研究所所蔵)の整理・報告書作成作業、②飯塚市に隣接する嘉穂郡・桂川町所在の金比羅山古墳の発掘調査。①の山の神古墳は、昭和8(1933)年頃に発見された80mの前方後円墳で、当時鏡山猛氏(後に九州大学教授)によって出土状況が記録され、5世紀後葉~末頃の基準資料を多く含みながら未報告であった九大所蔵資料について、現在多くの研究機関・研究者の方々の御協力の下、整理作業を進めています。また②の金比羅山古墳も80mの前方後円墳で、山の神古墳よりも築造時期が古く遡る可能性があります。これまで測量図が公表されておらず、詳細不明でしたが、今回築造時期・墳丘築造技術の確認を目指して発掘調査を実施しています。

両古墳は、装飾古墳として著名な寿命王塚古墳(前方後円墳・約86m)に次いで、いずれも遠賀川中流域では最大規模の前方後円墳です。またこの遠賀川中流域は、周防灘沿岸から福岡平野へと至る内陸交通の要衝であり、②の金比羅山古墳は当地域の古墳時代の始まりを考える上で、そして①の山の神古墳は5世紀後葉の「雄略朝」から6世紀前半の「継体朝」とそれ以降の時代の国家形成過程に深く関わる考古資料である可能性があります。今年度は調査・研究の最終年度であり、上記に関する研究成果をまとめた報告書を刊行予定です。



金比羅山古墳が所在する嘉穂郡桂川町・寿命丘陵の遠景写真(東から)。中央やや右側の高い地点が金比羅山古墳の位置(標高88.1m)。

### 【センター活動報告】

2014年6月13日(金) アジア埋蔵文化財研究センター 第3回研究会

講演題目1:「胎土分析による弥生土器の生産と移動」

講演者:石田智子・足立達朗・中野伸彦・小山内康人・田中良之  
(比較社会文化研究院)

講演題目2:「古墳時代の地域社会と古代国家形成過程

—北部九州・遠賀川中流域をフィールドとして—

講演者:辻田淳一郎(人文科学研究院)

### 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター ニュースレター No. 2

発行:〒819-0395 福岡市西区元岡744  
九州大学アジア埋蔵文化財研究センター  
編集:足立達朗  
発行日:2014年7月11日  
TEL:092-802-5663/FAX:092-802-5662  
E-mail:qa3rc@scs.kyushu-u.ac.jp  
ホームページ <http://scs.kyushu-u.ac.jp/qa3rc/>  
印刷:有限会社権蔵書房